同所に相並て立せ給ふ。これを相川の三社と称せり。土俗の説に、善知鳥の神社は、周王のおん女を祭るといへり。〔天注、縁起甚しき怪談なれば、録するに堪えず〕こは、妄誕なるべし。異朝の公主を祀ることありとも、いかで神明、春日を、左右にしたてまつるの理あらんや。祭る神こそ定かならね。善知鳥は出崎といふがごとし。陸奥の方言に、海浜の出崎を、うとふといふ。外浜なる水鳥に、背は太くて、眼下肉つきの処高く出たるあり。故に、これをも、うとふといふ。彼鳥を觜に喩て、出崎に比て、彼鳥を、うとふといふ歟。何にまれ、さし出たる処を、うとふといふは、東国の方言なり。美濃の御嶽駅の東に、うとふ村あり。信濃にうとふ阪あり、いまは烏頭と書く。これらみなさし出たる処なれば、うとふといふなるべし。

さて、うとふを善知鳥と書よしは、此鳥、甚しく人をおそれ、又よくその友を愛す。もし、その一隻を猟師に捕るゝことあれば、もろ鳥、そのほとりを翔めぐりて、鳴こと甚く、涙を落す事、雨の如しとなん。故に善智の二字を当たる歟。又、鴆とも書り。その義祥ならず。（後略）

真澄の随筆集に『しののはぐさ』があり、その中に「善知鳥社」という項目があり、前記の馬琴作『烹雑の記』の初めの部分をそのまま引用している。「佐渡ノ国雑太ノ郡……故にこれをも、うとふといふ、彼鳥の常に喩」で終わっている。『しののはぐさ』には目次が付されているが、「善知鳥社」は目次にはない項目である。反対に目次には「しこのしこぐさ」という項目があるが、反対に本文にはない。

また、前に記した通り『風の落葉』六巻に収容されている『雪の出羽路雄勝郡』の草稿の沖沢村（湯沢市）の項の割注の中に「此空坂、出羽陸奥にいとく多し、おのれ書し、善知鳥考、しのゝ葉草につばらにこの坂の事をいへり」と記している。

真澄は『烹雑の記』の文章をかかげ、これを否定する形で自分の見解を『しののはぐさ』の中で述べたのであったと、筆者は推定する。このことを取り上げるには躊躇されたのであろうか、目次からは削ったのである。

また、自分の見解を書いた部分は、真澄自身によって後日削除されたものであろうか、または自然に欠落したものであろうか。今となっては結論を見いだすことはできない。

しかし、真澄の結論は明らかであった。先に紹介した『外が浜づたい』の記述と宙外の記した『善知鳥考』の写本によって真澄の結論ははっきりしている。

むすび

真澄は東日本古に広がる「善知鳥」という地名と「善知鳥」と呼ばれる鳥について特別な関心をもって旅をしていたことは事実であった。当時一般的にはアイヌ語の「海岸に突き出た岬」即ち「出崎」が「うとう」だと語られていたのである。真澄は旅の中でこの説が全く事実に反していることを知ったのである。

文化9年（1812）2月と4月、真澄は古代秋田城の跡である寺内（秋田市）を訪ね日記《水の面影》を書いているが、その中に次のような記載がある。

雁子山というところがある。鹿児山であろうか。踏むと、しとしとと鳴る地であるので、かむごと云い、空というのである。阿仁の籠山（秋田県二ツ井町）は籠岩からきている。うとう山、うとう坂は大変多い名前である。私は善知鳥の語源について《外が浜風》という日記の中にこのことをくわしく記した。

《外が浜風》は真澄の誤記であり、《外が浜づたい》が正しい。真澄の結論は、我々が方言で「がんご」「うど」と呼んでいる言葉が「うどう」であり、漢字で書く場合「空洞」「空」と記すべきだったのである。

鳥としての「うとう」についても、かつて「つなぎ」と呼ばれた鳥が海岸の砂浜に穴を掘ってねぐらとしていることから、「空鳥」「穴鳥」と呼ばれていたのが「善知鳥」という文字を与えられたとしている。そして、この鳥が群をなして低空を飛ぶ習性があり、簡単に人間に捕獲されるとしている。